

原由希子* 荒川志津代**

1 目的

保育所や幼稚園などの就学前施設では、生きた体験として生き物と触れあう活動を大切と考えている。しかし、ウサギや鳥などの比較的大きな生き物(動物)に比べて、昆虫類の扱いは無頓着に行われがちである。また、命を大切にするという同じ理由で、触れることを禁止する者もいれば奨励する保育者もあり、扱いも多様である。そこで、就学前施設における昆虫飼育の在り方を考える一歩として、保育士などの指導者が昆虫飼育についてどのような対応をしているかについて、現状を調査した。そして昆虫を飼育する際における、保育者の在り方についての課題を明らかにしたいと考える。

2 方法

(1) 調査対象者と地域

調査者原の生まれ育った地である、愛知県A町(現在市町村合併により田原市の一部)における全ての就学前施設(保育所5園)に勤務する保育士40名。

A町は愛知県の最南端に位置する、人口22500人の農業地域である。野菜や果物・花などの近郊園芸農業が盛んな、自然環境に恵まれた地域であり、保育所の園庭も広い。

(2) 調査時期と方法

2007年10月上旬、主には質問紙(一部インタビュー)により調査した。16項目の質問紙を配布し、1週間後に回収した。

3 結果と考察

質問紙の回収率は100%であり、A町の全保育士である。面接にに応じてくれた保育士からは、付加的情報も得た。

(1) 施設での飼育経験とその理由

92%の保育士がクラスでの昆虫飼育の経験があった。子どもが捕まえてきた昆虫をすべて飼うと答えた保育士は4名のみで、86%の保育士は、飼う時と飼わない時があった。すべて飼うという4名は、「生き物に触れて欲しい」「子どもが興味を持ったものだから」等の理由によっていた。飼う時と飼わない時の基準として1位にあがったのは、「みんなが飼いたいと言ったとき」であり、2位は「子どもが好きな昆虫の時」と「スペースがあるとき」であった。4位

が「飼育が簡単なものとき」である。その他、「珍しい昆虫」、子どもや自分のそれまでの飼育経験の有無も、基準としてあげられていた。

また、飼育経験をその他の保育活動と関連させている者は56%であり、その内容は、「折紙などの間接的活動」が多く(90%)、昆虫を使った直接的活動は半数弱(45%)であった。

昆虫飼育の特質としては、「子どもが世話しやすい」点をあげる者が最も多かった。2位が「負担が少ない」、3位が「身近な生き物なので大切に思える」、4位が「死が楽に受け入れられてしまう」であった。

(2) 飼育の担い手とその理由

クラスで飼育する際にどんなことを誰がしているか(図1)聞いた。飼育経験者の8割以上が行っていることは、「えさやり」「虫かご内の環境設定」であった。5割以上～8割未満の者が行っていたことは、「掃除」「設置場所を決める」「水やり」「生態を図鑑で調べる」である。飼育における基本的事項が、行われない場合もあることがわかった。

設置場所の決定には保育士が大きく関わっており、その第1の理由は、「落下などの危険」に配慮した子どもへの安全の面であった。その他の理由として、「子どもの通る場所に置きたい」「昆虫の習性」があげられていた。

「虫かご内の環境の設定」や「掃除」も保育士の関与の度合いが大きかった。その理由の第1は、「(保育士の姿から)見て学んで欲しい」というものであり、次に「子どもでは大変・まだ出来ない」などが理由であった。しかしこの2つの項目では、子どものみを担当者としている保育士も若干いた。

「水やり」「えさやり」は、飼育における主だった活動であるが、これらは、保育士と子どもが共同で(一緒に)行うことが多いようであった。その理由の第1位は、「愛情を持って欲しいから」であり、これが理由の主たるものであった。その他には、「生きた体験をして欲しい」「見て学んでほしい」などが見られた。

「生態を図鑑で調べる」という活動は、100%子どもと保育士の共同作業であった。

その主な理由としては、「色々な子どもに興味を持って欲しい」「生きた体験をしてもらいたい」「愛情を持って欲しい」であった。保育士自身が飼育資料を得るための「自分自身の知識を増やしたい」を挙げたものは2名しかおらず、適切な飼育法を知るといよりは、子どもの興味関心を喚起する目的で図鑑が利用されていると思われた。

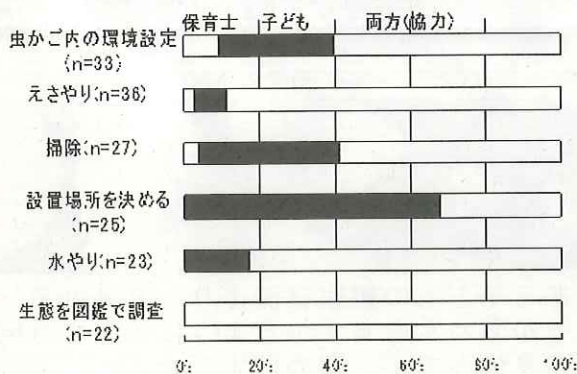


図1 飼育作業と担い手

(3) 飼育期間と終了の方法

飼育期間は、「興味がなくなる」まで、及び「死ぬ」までというものが多かった(それぞれ約3割)。一定期間がたったら、昆虫を逃がす保育士が多かった。その際に子どもに何らかの話をする保育士が96%であり、その内容は、「昆虫が家(親元)に帰る」といったお話や「かわいそうだから」「弱ってきた(元気がない)から」などであった。保育園が休みになるなどの現実的理由を説明する場合もあった。その際昆虫の命について気づかせるよう配慮していた。また、昆虫が死んだことによって飼育が終了する場合、90%の保育士が子どもに死についての話をしていた。死んだ理由を話したり考えたり、お墓を作ったりする場合もあった。保育士から積極的に対応するというより、子どもからの反応を受けとめるようにしている保育士もいた。

(4) 保育士の個人的体験と施設での飼育の関連

保育士自身が個人として昆虫に対してどのような思いを持っているのかを聞いたところ、「少し苦手」という回答が最も多かった(51%)。好きと答えた者が27%、嫌いだと答えた者が17%であった。自分自身の好みを抑制して、子どもの体験の機会を重視していることがわかった。また、保育士自身が子どもの頃に飼った昆虫と、保育士として職場(クラス)で飼っている昆虫を比較したところ、ほぼ同じであった。唯一異なっているのは、かたつむりであった。

これは施設でのみ飼っていた(図2)。就学前施設においては、かたつむりが、とりわけ季節感を表す生き物として位置づけられているためだろうと思われた。

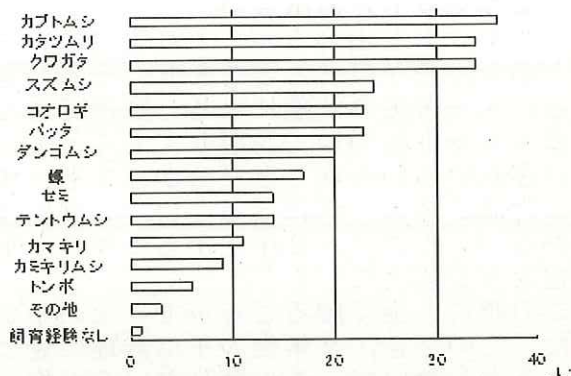


図2 保育所で飼育経験のある昆虫

4 総合考察と課題

昆虫は身近な生き物のため世話も容易と考えられ、また子ども自身が捕まえてくることから飼育の対象となりやすく、保育者自身もその飼育の機会を、生き物への愛情や関心を育てる機会にしようと試みていることがわかった。

しかし、飼育の実態や飼育終了の方法については課題もあるように思われた。適切な飼育がなされなかったり世話の不十分さのために、昆虫が弱ってくると「捨てる」ことになっている場合もあった。保育者が伝えようとしている愛情や命とは反対のメッセージが伝わってしまうこともあり得ると思われる。「命」を子どもに言葉で説明として伝えるとともに、保育者自身が昆虫の命に対して愛情を持つことが必要だと感じた。その愛とは、その生き物の特質についての理解とそれに基づく配慮であろう。

その意味では、自然環境に恵まれた地域の場合、飼育しないという選択肢も考慮される。しかし昆虫飼育には、「捕まえた!」という喜びを子どもが味わったり、普段見られない昆虫の動きや習性を観察出来るという側面がある。昆虫に対する一層の興味や関心も、飼育を通して生まれる。飼育にはその利点がある。ただし飼育すると決めた限りは、その責任を全うすべきである。

また昆虫飼育の今後の課題として、子どもに興味をもってもらおうというねらいがある以上、保育者としてその興味が続くよう適切な働きかけを検討すべきと考える。今後、保育者としてぜひ取り組んでみたい。

(名古屋女子大学文学部児童教育学科
*4年生 **教員)